

## 2章 調査結果のまとめ

単純集計及びクロス集計の結果を考察し  
児童生徒の意識の特徴と  
望ましい人間関係を構築するための手だてを  
8項目のトピックにまとめました。

グラフ中の割合は、小数第2位を四捨五入したため、合計が100%にならない場合があります。

グラフ中の質問は、中学生向けのものを若干省略した表現を用いました。

## 児童生徒の意識の特徴と 望ましい人間関係を構築するための8つの手だて

- 1 コミュニケーションについての教員の働きかけが、児童生徒の人間関係を向上させます。
- 2 特別活動や各教科の授業に、本音で話し合いができる環境と活動を整えることが大切です。
- 3 教員に気持ちを聞いてもらうことが、児童生徒の人間関係を向上させます。
- 4 児童生徒は、気持ちを聞いてくれる教員、助けてくれる教員を信頼して、その指導を受け入れます。
- 5 聞き合うことが、共感的な人間関係を形成します。
- 6 教え合う活動、話し合う活動が、児童生徒の相互理解を深め、人間関係を向上させます。
- 7 家庭でのコミュニケーションの深さが、児童生徒のよりよい人間関係づくりを支えます。
- 8 発達の特徴を指導に生かすことが大切です。

## クロス集計の見方

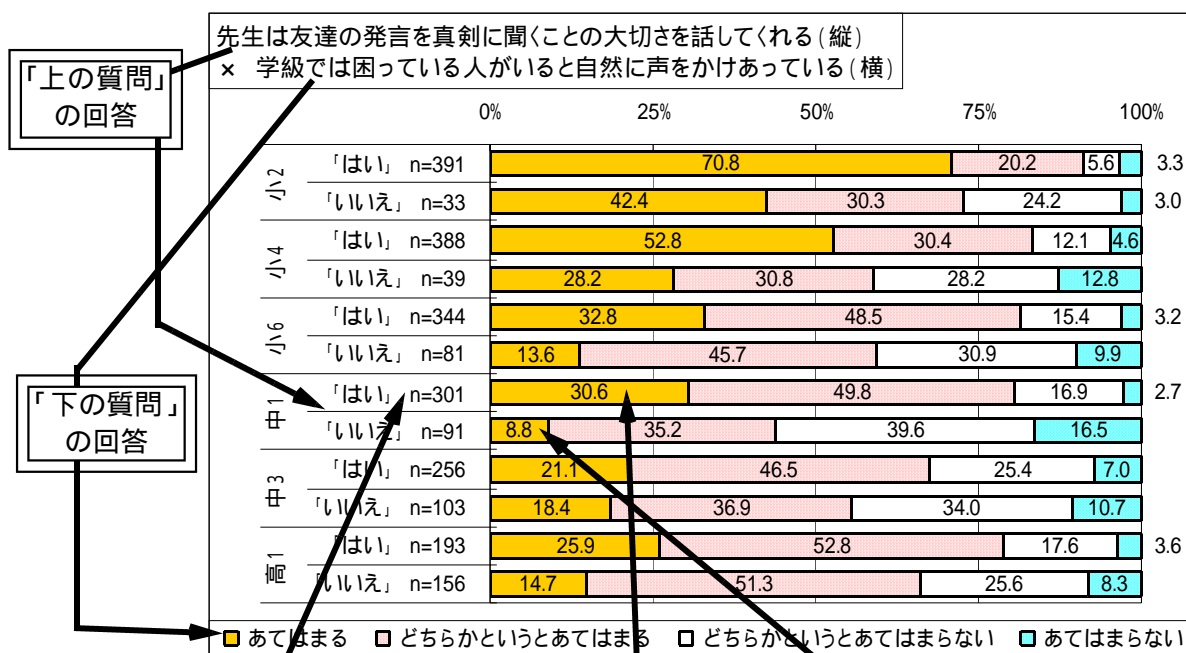
クロスさせた2つの質問はグラフ左上に示してあります。ここでは、この2つの質問のうち、上に示したものを便宜上「上の質問」、下に示したものを「下の質問」とします。

質問は「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」の4つの選択肢のいずれかで回答を求めました。4つの選択肢による回答を「はい」と「いいえ」の2つに分けました。

「はい」は「あてはまる」と「どちらかというにあてはまる」をあわせたもの  
 「いいえ」は「どちらかというにあてはまらない」と「あてはまらない」をあわせたもの

下図は中1を例に傾向の読み取り方を説明したものです。「上の質問」で「はい」と「いいえ」と回答した生徒について、「下の質問」で「あてはまる」と回答した割合を比較します。

下図の中1のような場合、「上の質問」で「はい」と回答した生徒は、「下の質問」で「あてはまる」と回答する傾向がみられる、ということになります。



nは人数を表します。「上の質問」に「はい」と答えた中学1年生は、301人です。

「上の質問」で「はい」と回答した中学1年生301人の中で、「下の質問」で「あてはまる」と回答した生徒の割合は、30.6%です。

「上の質問」で「いいえ」と回答した中学1年生91人の中で、「下の質問」で「あてはまる」と回答した生徒の割合は、8.8%です。

この形でないグラフは、単純集計の結果を表しています。

**本章に取り上げたクロス集計のグラフ及び8つの手だてについて**

取り上げたクロス集計のグラフは、4章に掲載した関連するグラフ群の中から代表的なものを取り上げました。本章の8つの手だては、本章に取り上げたものだけでなく、グラフ群全体及び聞き取り調査を踏まえてまとめたものです。

# 1 コミュニケーションについての教員の働きかけが、児童生徒の人間関係を向上させます。

今後丁寧な指導をしていきましょう。

聞くこと、話し合うこと、協力することの大切さについて教員が指導することが、児童生徒の人間関係を向上させています。

児童生徒は学校での人間関係が向上することを願い、教員に期待しているものと考えられます。

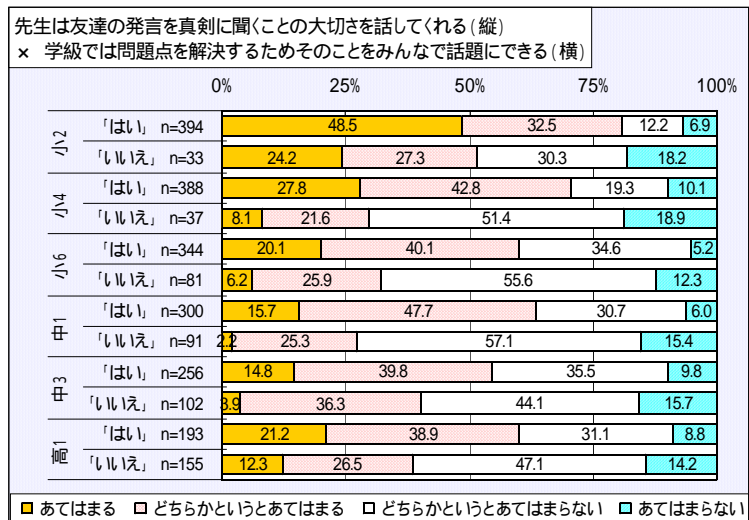
機会あるたびに、児童生徒に丁寧な指導していきましょう。

## (1) 友達の発言を真剣に聞くように指導されている児童生徒ほど、学級の問題点を話題にできます。

先生に友達の発言を聞くことの大切さを指導されていると回答した児童生徒は、問題点を解決するためにそのことを話題にできると回答する傾向がみられます。

- 別のデータからは、先生に友達の発言を聞くことの大切さを指導されていると回答した児童生徒は、困っている人がいると自然に声をかけあうと回答する傾向もみられます。

(p55 グラフ32群参照)

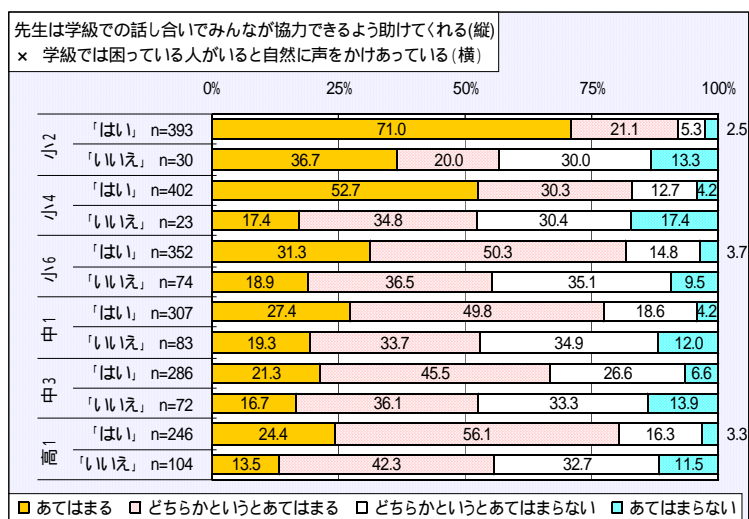


## (2) 話し合い活動で協力できるように指導されている児童生徒ほど、学級に困っている人がいると声をかけあっています。

話し合いでうまく協力できるよう先生に助けられていると回答した児童生徒は、困っている人がいると自然に声をかけあうと回答する傾向がみられます。

- 別のデータからは、話し合いで協力できるように先生に助けられようと回答した児童生徒は、問題点を解決するため話題にできると回答する傾向もみられます。
- さらに別のデータからは、先生から協力の大切さを話してもらっていると回答した児童生徒は、問題点を解決するために話題にできる、困っている人がいると声をかけあうと回答する傾向もみられます。

(p55.56 グラフ33群.34群参照)



## 聞き取り調査より その1

### 聞き合うことを重視し、授業や特別活動等の諸活動で 様々な仕掛けを用意しているA小学校

A小学校の平成18年度の学校評価から見えてきた課題は、「話すこと」、「書くこと」を含めた表現力の育成であった。この結果を受けて、表現力を高めるための指導の工夫を考え、実践を始めた。表現力を高めるためには、聞く力を身に付けることが大切であると考え、「聞くこと」の指導に力を入れた。教員が、機会を捉えて意図的に、「聞くこと」の大切さを指導したため、児童は「話を聞くことはためになる」という意識を持つようになった。授業中の集中力が増し、集会活動では、教員や代表児童の話静静地に聞くことができるようになってきた。

A小学校では、各教科、領域の授業に、気軽に意見交換をできるよう様々な話し合い活動の場を設定している。たとえば、高学年では「パディ」と称して、ペア学習を意図的に取り入れている。二人で意見交換してから発表することにより、自信を持って発表することができる。時には、ペアを組んだ相手の意見を発表する機会も設けている。児童は、相手の思いを理解しようとして聞き、相手の意見をみんなに分かるように発表しようとする。この活動により、学級内に互いの意見を認め合う雰囲気が出てきた。

中学年では、考える活動や書く活動の際に、「取材タイム」と称して、聞きたい相手に、自由に意見を聞いてくる場を設けている。友達の思いや考えのよさに触れ、自分の考えを広げ、深めることに役立っている。

特別活動でも、意図的に伝え合う場を設定している。年度末に行われるクラブ説明会では、5年児童の提案をもとに、児童が次年度開設するクラブを決定する。5年児童が、「私たちは、クラブを立ち上げたい!」と3～5年児童全員に提案する。ある程度人数が集まらないとクラブは発足できないため、提案者は、クラブの魅力を伝えるために工夫する。聞き手は、自分の入りたいクラブを選択するために、真剣に聞く。目的意識が明確であるため、意欲が高まり、「話すこと・聞くこと」の力が身に付く。クラブの発足、計画立案、実際の活動を通して、自己決定の機会が与えられ、児童は、互いの考えを尊重することができるようになり、集団への帰属意識も高まっている。

## アンケートからみられるA小学校の特色

### 児童が「はい」と回答した割合が、調査協力校(小)の中で高い項目

教科の学習で、友達の発言を聞くことは、自分のためになると思う。  
学級では、困っている人がいると、自然に声をかけあっている。  
私は、みんなで決めたままりや約束を、守ろうとしている。  
私は教科の学習以外の学級の話合いで、自分の考えを進んで発言している。  
教科の学習以外で、学級の友達は、自分の発言をよく聞いてくれる。

### 児童が「はい」と回答した割合が、調査協力校(小)の中で低い項目

みんなの前に出て発表するとき、とても緊張する。

## 2 特別活動や各教科の授業に、本音で話し合いができる環境と活動を整えることが大切です。

本気で関わらせて、成長を見届けていますか？

児童生徒が、学校での共同生活の中で主体的に考え、その考えを表現し合いながら相互理解を深めていくことが、よりよい人間関係をつくと考えられます。

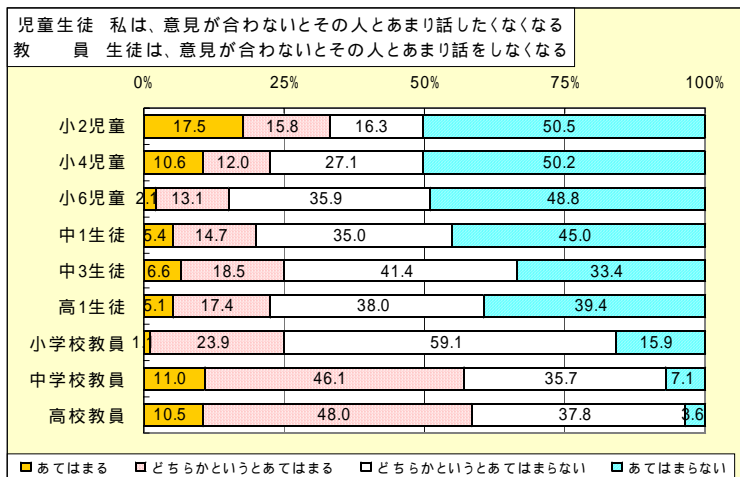
多くの児童生徒は友達と意見が合わなくても会話を避けることはないと考える一方、特別活動や授業などではうまく対話や話し合いができないと感じています。

特別活動や各教科の時間でも、児童生徒が本気で関わる中でお互いの考えを率直に交換し合える環境を整え、今まで以上に、話し合い活動を工夫しましょう。

### (1) 多くの児童生徒は、意見が合わないことがあっても、その人と会話を避けることはないと回答していますが、教員の持つ印象とは異なります。

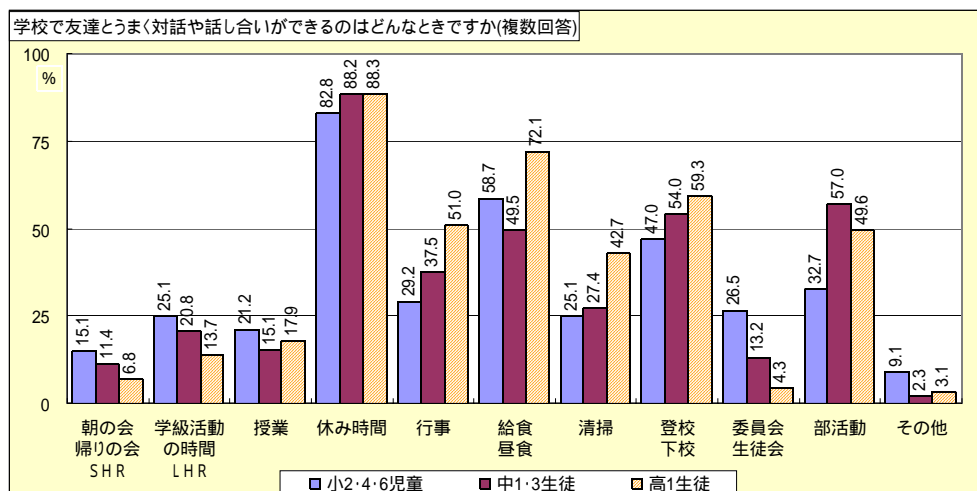
「友達と意見が合わないことがあると、その人とあまり話したくなくなる」について、「はい」と回答した児童生徒の割合は、3割を下回ります。一方で「生徒は意見が合わないとその人と話をしなくなる」について「はい」と回答した中・高の教員の割合は約6割です。

(p32 グラフ9群参照)



### (2) 児童生徒は、特別活動や教科の時間では、うまく対話や話し合いができないと感じています。

「学校で友達とうまく対話や話し合いができるのはどんなときか」について複数回答で質問したところ、休み時間、昼食時、登下校時と回答する割合が



高い一方で、学級活動の時間(LHR)、授業、委員会・生徒会と回答する割合は低く、学年が進むにつれて割合が低下する傾向があることが分かります。(p47グラフ30-1参照)



## 聞き取り調査より その2

### 専門科目を柱として 共に学び合える人間関係づくりを推進するB高等学校

専門学科では、専門科目の内容が学科を特色付けている。たとえば、福祉学科については、中学生とその保護者に対して、次のように紹介されている。

#### 福祉学科の学習内容は・・・

1年生より社会福祉に関する基礎的な知識を学ぶとともに、校内で介護技術の基本を実習します。

2年生になると実際に高齢者施設や障害者施設での介護実習を行います。

3年生では在宅での高齢者介護の実習も加わります。要介護高齢者とのふれあいなどをおして、心豊かな人間性を身に付け、自立支援の技術を生徒自身の体験から学びます。

「県立高校学科ガイド2007(栃木県教育委員会)」より

B高等学校では、入学後の学習や生活に関するガイダンスを通して、このような特色を生徒一人一人が十分に理解するよう指導している。特に福祉マインド、コミュニケーション能力などを3年間を通して高めていく組織的な取組の成果がよく現れている。

1年生では、必修科目の「社会福祉基礎」において、特別支援学校の児童との交流活動を実施している。主な内容は、6月と11月に行う体験活動やレクリエーション活動の援助で、企画、事前準備、当日の実施を、グループ単位で行う。活動内容自体、生徒一人一人の意識を高めることが期待される魅力ある科目であるが、それ以上に、グループ活動を通じて、生徒同士が話し合ったり他者の発言を真剣に聞いたりする態度が育っていることが注目すべき点である。たとえば、放課後の交流活動の企画や準備に参加しない生徒には、声をかけあってグループ全体の参画意識を高めようとする様子が見られる。話し合いの中で、様々な意見が出されるが、自分と異なる意見を否定するのではなく、お互いを認めてそれぞれのアイデアを生かそうとしている。

また、教員は、このようなクラス全体の雰囲気作りや専門的な助言を行い、グループのリーダーを中心とする主体的な活動を支援する役割を果たしている。学科の目的や特色について、教職員間で共通理解が得られているため、クラス担任を中心としながらも、専門科目の指導に携わる複数の教職員による指導体制がつけられている。

さらに、このような生徒の姿勢は授業だけにとどまらず、課外活動としてボランティアに多数参加したり、学校行事や生徒会活動への積極的な参加にもつながっている。

### アンケートからみられるB高等学校の特色

#### 生徒が「はい」と回答した割合が、調査協力校(高)の平均を上回る主な項目

先生は、教科の学習で、友達の発言を真剣に聞くことの大切さを話してくれる。

私は、その日の学校のできごとについて家の人に話す。

先生は、教科の学習で、グループ学習や話し合い活動の機会を多くつくっている

私は、学校のことで困ったり、悩んだりしたとき、同じ学級以外の友達に話す。

先生は、清掃や給食などのときに、みんなと協力することの大切さを話してくれる

学級では、問題点を解決するため、そのことをみんなで話題にすることができる。

先生は、生徒会活動や部活動で、みんながうまく協力できるように助けてくれる。

### 3 教員に気持ちを聞いてもらうことが、児童生徒の人間関係を向上させます。

「受容」を重視した児童・生徒指導を行っていますか？

教員に気持ちを聞いてもらっている児童生徒ほど、学級の向上を目指して問題点を話題にできます。

教員の受容的な態度が、児童生徒が本来持っている力を発揮するための安心感と、教員への信頼感を与えているものと考えられます。

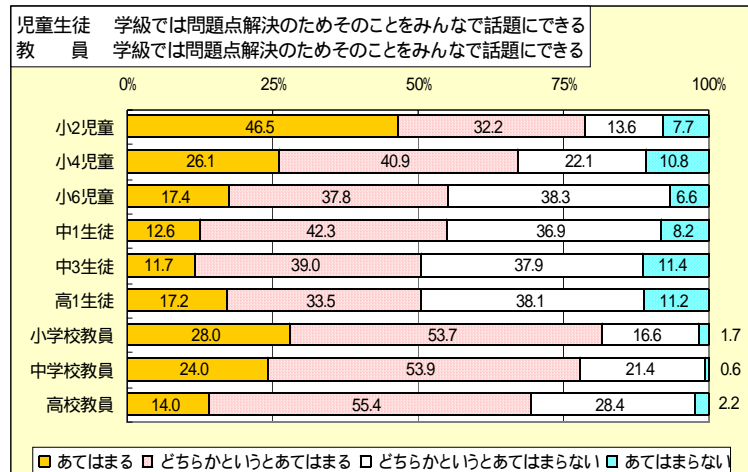
「受容」を重視した児童・生徒指導を推進することが大切です。

なお、問題行動に対する毅然とした指導は、「受容」を重視した児童・生徒指導を支えるものであり、対立するものではありません。

#### (1) 児童生徒は、教員が感じているほど、学級の問題点を解決するためにそのことをみんなで話題にできていません。

「学級では問題点をなくすため、そのことをみんなで話題にすることができる」について、「はい」と「いいえ」の児童生徒の回答の割合は、小6以降、それぞれ5割程度です。一方教員が同様の質問に「はい」と回答した割合は7割を超えています。

(p45 グラフ28群参照)

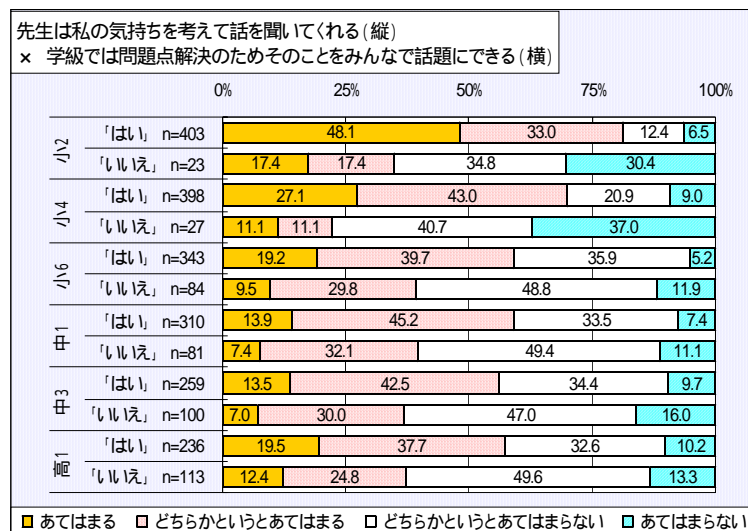


#### (2) 教員に気持ちを聞いてもらっている児童生徒ほど、学級の問題点を解決するためにそのことをみんなで話題にすることができます。

先生に気持ちを聞いてもらっていると回答した児童生徒は、問題点を解決するためにそのことを話題にできると回答する傾向がみられます。

別のデータでは、先生に気持ちを聞いてもらっていると回答した児童生徒は、困っている人がいるとみんなで自然に声をかけあうと回答する傾向もみられます。

(p56 グラフ35群参照)





## 聞き取り調査より その3

### 特別支援教育を学校全体に広げ 一人一人が活かされるあたたかい居場所づくりに 取り組んでいるC小学校

C小学校では、平成15年度に特別支援学級を立ち上げ、学校全体で特別支援教育に取り組んでいる。教職員が意見を出し合い、可能なことをみんなで考えていこうとする雰囲気、児童の望ましい人間関係づくりに大いに役立っている。異年齢集団での体験活動や集会活動が積極的に行われ、児童が地域の方々から認められ、自信を高める機会となっている。学校と保護者との関係が良好で、学校を信頼して相談に訪れる保護者も少なくない。

年度当初、特別支援コーディネーターが支援を要する児童について全職員に説明し、どうすればその子が安定していられるか、周囲の子をどう育てるか、共通理解を図っている。また、指導計画を明確にし、教職員の対応が異ならないよう工夫している。たとえば、支援児童がなくなったら自分で教員に申し出て、支援教員は「～まで終わったら 分間の休憩にしましょう。」と約束を交わし、守れたら褒めるようにしている。こうすることで、本人は安心感を得て、自分の行動に責任を持つようになってくる。周囲の子も「勝手な行動だ」ととらえるのではなく、その子の努力を認めるようになった。

児童指導について、4年生の学級担任から次のような話があった。「朝は、教室で児童を待つ。家庭であまり話を聞いてもらえない子ほど、担任に話してくる。聞いているだけだが、その子は次第に落ち着き、友達の話も聞けるようになってくる。休み時間も、できるだけこういった児童の話聞くようにしている。こうした中で児童からのサインを感じ取ることができるようになる。一方、授業中は、基礎・基本を学ぶための学習訓練を徹底し、私語を慎むように指導している。正しい行動、価値の高いものを教え、望ましい経験をたくさんさせるように心がけている。」

平成18年度から、学校として、4年生以上がクラブ活動をしている時間を、3年生の「共遊の時間」にした。3年生の学級担任は、クラブ活動を担当せず、学級の児童と共に遊び、仲間づくりを行う。教員は遊びの輪に加わるものの、その場を仕切らないようにする。児童が遊びを決め、リーダーを中心に活動できるように支援する。共に遊びながらコミュニケーションをとり、児童の言葉を拾うという教育相談的な意味合いがある。「1年間続けた共有の時間は、子どもたちの人間関係づくりに大変よかった。」と3年生の学級担任が語ってくれた。

## アンケートからみられるC小学校の特色

### 児童が「はい」と回答した割合が、調査協力校(小)の中で高い項目

学級では問題点を解決するためそのことをみんなで話題にすることができる。

縦割り班の活動では、協力しない人がいると、上級生が注意してくれる。

私は、学校のことで困ったり、悩んだりしたとき、学級の友達に話す。

先生は、教科の学習で、友達の発言を真剣に聞くことの大切さを話してくれる。

先生は、学級での話し合いで、みんながうまく協力できるように助けてくれる。

私は、学校からの連絡やプリントがあると、その内容について家の人に話す。

私は、困ったり悩んだりしたとき、そのことを家の人に話す。

## 4 児童生徒は、気持ちを聞いてくれる教員、助けてくれる教員を信頼して、その指導を受け入れます。

児童生徒に分かるメッセージを発信していますか？

教員が熱心に働きかけているにもかかわらず、指導を積極的に受け入れることのできない児童生徒が、学年が上がるにつれて増える傾向にあります。

しかし、児童生徒は、自分の気持ちを考えて話を聞いてくれる、助けてくれると感じる教員を信頼し、その教員の指導を前向きにとらえています。

児童生徒は、自分なりの見方で教員をとらえ信頼し、その信頼を前提として、個々の指導を受け止めているものと考えられます。

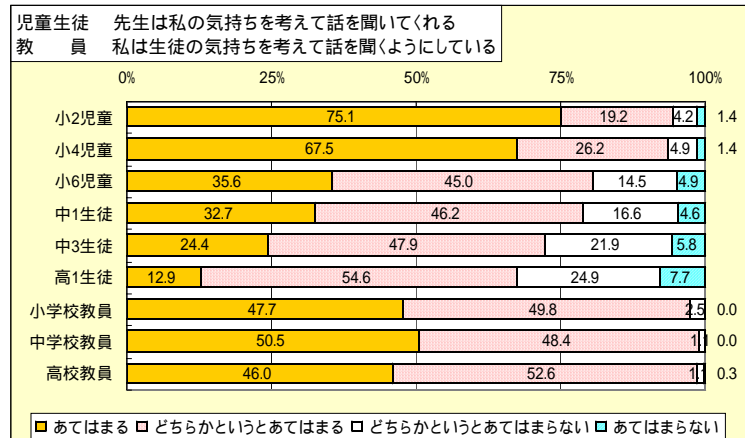
「教員が児童生徒のことを本気で考えている」というメッセージを、児童生徒が理解できるような形で伝えていきましょう。

### (1) 教員は気持ちを考えて聞くようにしていますが、学年が上がるほど、聞いてくれないと思っている児童生徒が増えています。

「先生は私の気持ちを考えて話を聞いてくれる」について、「はい」と回答した児童生徒の割合は、教員の回答の割合を下回ります。

- 別の質問「先生は声をかけてくれる」「先生は協力することの大切さを話してくれる」などについても同様の結果がみられます。

(p39～42 グラフ19群～25群参照)

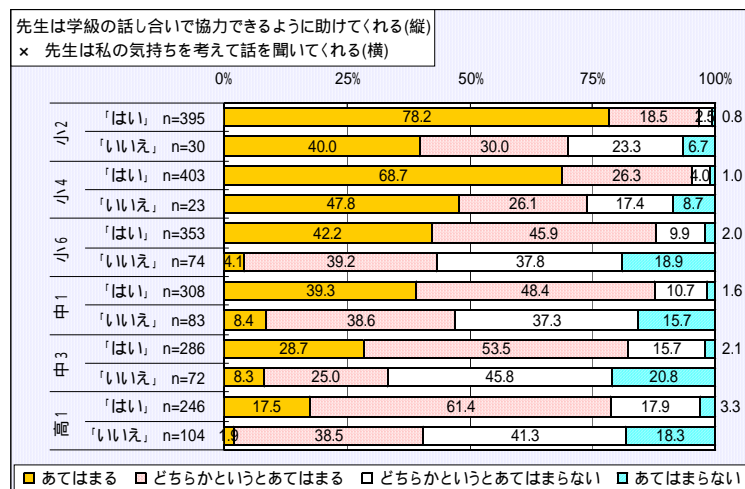


### (2) 話し合いで協力できるように指導されている児童生徒ほど、自分の気持ちを教員が聞いてくれていると受け止めています。

話し合いでうまく協力できるように先生に助けられていると回答した児童生徒は、先生に気持ちを聞いてもらっていると回答する傾向がみられます。

- 別のデータでは、話し合いでうまく協力できるように先生に助けられていると回答した児童生徒は、先生に声をかけてもらったり、協力することの大切さを話してもらったりしているなど回答する傾向がみられ、教員の指導を前向きに受け止めていることがうかがえます。

別のデータでは、先生に気持ちを考えて話を聞いてもらっている児童生徒についても、教員の指導を前向きに受け止めていることがうかがえます。(p57.58 グラフ36群.37群参照)



## 聞き取り調査より その4

### 体験的な学習や学校行事などを柱として共に学び合える 人間関係づくりを推進するD高等学校

体験的な学習や学校行事は、生徒同士が協力し合ったり、切磋琢磨し合ったりできるような人間関係を形成するために重要な役割を担っている。しかし、それらの成果が一過性のものに終わってしまったり、学習や活動の意図や全体像が生徒に十分伝わっていません。そこで、D高等学校では、生徒が興味を持って学習や活動に取り組めるように、学年やクラスの通信を工夫して、総合的な学習の時間でのグループ学習や学校行事などについての事前のガイダンスを効果的に行っている。

**第1学年 学年だより**  
第1号 (平成19年7月10日発行)

みなさんこんにちは。入学後約3カ月がたちました。今年の1年生は「元気」のたくさんで、とても活気に溢れた学年だと思います。1学期も終了間近。もうすぐ楽しいこと、辛いこと色々あったと思いますが、いままでの生活を振り返り、より進めるために各自努力をしていって欲しいと思います。

1. 学年目標  
基本的な生活習慣を確立するとともに、他人を思いやる心や互いに協力する心身の調和のとれた生徒の育成を目指し、何事にも主体的に取り組む生徒を育成す  
○努力点 (1) 服装、髪型などの容姿指導の徹底を図る。  
(2) 欠席、遅刻など時間を守る指導の徹底  
(3) 教師自らの率先し  
(4) 生徒達だけででき  
(5) 生徒自らが自身を

2. 今後の主な行事

月	行
12	性教育講演会
17~18	こころみ学習
7	12日 交通・生活安全講話
20	1学期終業式

3. 新入生歓迎花見・句会がありました  
4月13日、満開の桜の下、新入生歓迎花見・句会がありました。1年生から3年生まで縦割りの4グループに分かれて、楽しく昼食をとり、俳句を作りました。2学期の体育祭でも、このグループで参加します。

学年だよりを配布したり、クラスごとに目標を示したりして、学習や生活の指針が明確になるようにガイダンスを行っている。

- ・ 縦割りのグループ活動を、複数の行事に取り入れている。行事同士の関連性を明らかにしている。(抜粋1)
- ・ 総合的な学習の時間は、3年間を通じて取り組む大切な学習活動であることを伝えている。(抜粋2)



5. こころみ学習について  
総合的な学習の時間の事を、本校では「こころみ学習」と呼んでいます。1年生は「環境問題」、2年生は「国際理解」、3年生は「ボランティア活動」を大きなテーマに設定しています。7月と11月の2回、それぞれ集約して授業を実施します。

抜粋 2

## アンケートからみられるD高等学校の特色

### 生徒が「はい」と回答した割合が、協力校(高)の平均を大きく上回る項目

私は、学校のことで困ったり、悩んだりしたとき、学級の友達に話す。

生徒会活動や部活動では、困っている人がいると、自然に声をかけあっている。

私は、学校のことで困ったり、悩んだりしたとき、同じ学級以外の友達に話す。

私は、その日の学校でのできごとについて家の人に話す。

私は、友達の気持ちを考えながら話を聞いている。

## 5 聞き合うことが、共感的な人間関係を形成します。

授業で児童・生徒指導をしていますか？

友達に発言を聞いてもらえる児童生徒ほど、困っている人がいると声をかけあっています。

発言を友達に聞いてもらえることで、児童生徒は「自己存在感」を高め、「自己決定」することを経験し、相互理解を深めながら、友達との「共感的人間関係」を形成しているものと考えられます。

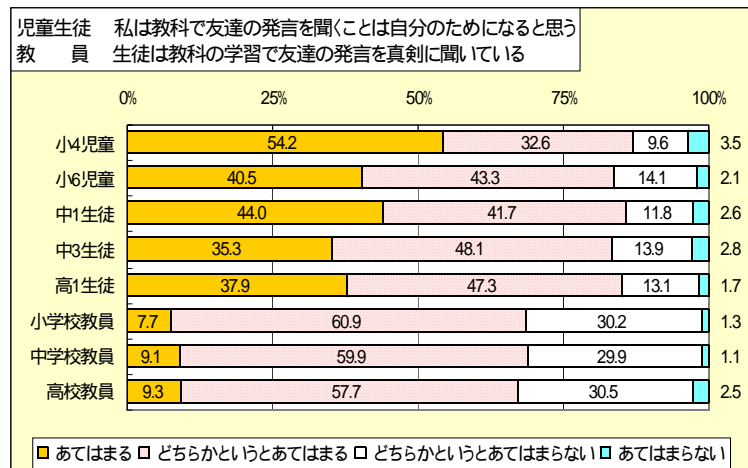
これまで以上に聞き合う活動を重視して、意図的に取り入れていきましょう。

### (1) 多くの児童生徒は、友達の発言を聞くことに意味を見いだしています。

「友達の発言を聞くことは自分のためになる」について、「はい」と回答した児童生徒の割合は8割を超えています。一方、児童生徒が友達の発言を真剣に聞いて感じている教員の割合は7割程度です。

- 別の質問「相手の気持ちを考えながら話を聞いている」について、「はい」と回答した児童生徒の割合は7割から8割程度です。

(p30.31 グラフ6.7群参照)

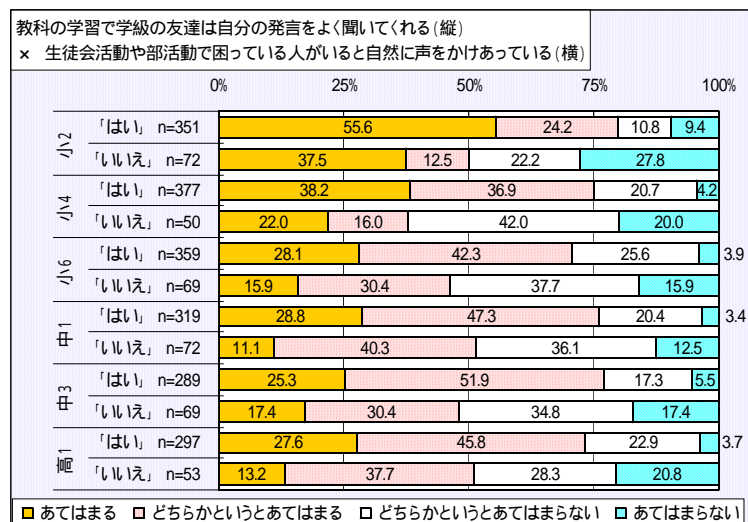


### (2) 教科の学習で友達に発言を聞いてもらえる児童生徒ほど、生徒会活動や部活動で困っている人がいると声をかけあっています。

教科の学習で発言を友達に聞いてもらえると回答した児童生徒は、生徒会活動や部活動で困っている人がいると自然に声をかけあっていると回答する傾向がみられます。

- 別のデータからは、友達に発言を聞いてもらえると回答した児童生徒は、悩んだとき学級の友達に話す、学級の問題点を解決のために話題できると回答する傾向もみられます。

(p59 グラフ38.39群参照)





## 聞き取り調査より その5

### ピア・サポート活動を軸にした 予防的な生徒指導を推進する E 中学校

E 中学校では、悩みを誰に相談するか生徒にアンケートをとったところ、「教員」よりも「友達」という回答が多い事実が明らかになり、このことから生徒相互で相談し合える、よりよい人間関係づくりの核になる生徒の育成を目指し、ピア・サポート活動を行うようになった。この中学校で取り組んでいるピア・サポート活動のねらいには、この他に、いじめ問題の早期発見や解決、不登校予防、教育相談活動の充実、仲間相互のケア、スクールカウンセラー（以下 S C）の効果的活用等がある。

ピア・サポーターは、各クラスの学級委員を中心に組織され、計画的に育成される。第 1 ステージのプログラムは、仲間を支援するためのスキル習得トレーニング、第 2 ステージは、仲間を支援するための個人プランニング、第 3 ステージは、仲間への支援活動である。スキル習得トレーニングは、一泊二日の合宿を通して行われ、資質を集中的に高めるプログラムが組まれている。

学級担任は、職員研修で「Q-U」や構成的グループエンカウンター（以下 S G E）を学び、各学級で実施している。S G E を実践するときは、すでにトレーニングを受けたピア・サポーターが活動の核となって雰囲気をつくる。実践の成果を「Q-U」を活用して評価している。

このように、E 中学校のピア・サポート活動は、生徒相互の相談活動という枠組みを超えて、生徒のリーダー育成、生徒理解と学級経営で学級担任を支えるもの、S E の支援の機会を増やすものなどとして機能し、教員・生徒・S C 相互の学校規模のコミュニケーションを促進する役割を果たしている。予防的な生徒指導が E 中学校で正常に機能していることの大きな理由は、学校全体の取組として、ピア・サポート活動を位置付け実践していることが挙げられる。

教員からは、「このような生徒指導が、教員の心を開き、教員同士が仲が良くなっている。」「みんなでやっていこうという意識が強くなった。自分のクラスというより、学年全体を見る先生が多くなった。」「職員同士は馴れ合いではなく、厳しさもある。チャイムと同時に授業が始まらないことはない。」などの声が聞かれた。

「教員も生徒もオープンで、個性を出していけるような環境をつくっていくことが生徒指導の条件整備だ。」という生徒指導主事の言葉が印象的であった。

#### アンケートからみられる E 中学校の特色

##### 生徒が「はい」と回答した割合が、調査協力校(中)の中で高い項目

教科の学習で、学級の友達は、自分の発言をよく聞いてくれる。

教科の学習以外で、学級の友達は、自分の発言をよく聞いてくれる。

学級では、問題点を解決するため、そのことをみんなで話題にすることができる。

生徒会活動や部活動では、問題点を解決するため、そのことをみんなで話題にすることができる。

生徒会活動や部活動では、困っている人がいると、自然に声をかけあっている。

私は、友達の気持ちを考えながら話を聞いている。

##### 生徒が「はい」と回答した割合が、調査協力校(中)の中で低い項目

私は、みんなの前に出て発表するとき、とても緊張する。

## 6 教え合う活動、話し合う活動が、児童生徒の相互理解を深め、人間関係を向上させます。

授業の一コマが人間関係を向上させることを意識していますか？

教え合う活動や話し合う活動をしている児童生徒ほど、悩みを学級の友達に話しています。

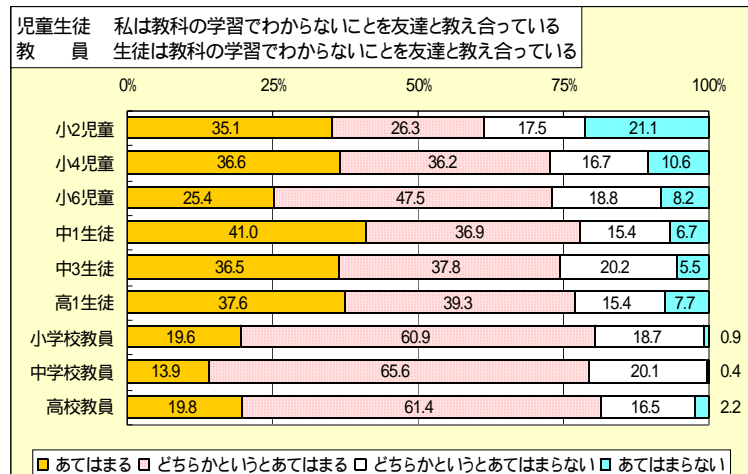
これは、教え合う活動や話し合う活動が、学習内容の多面的な理解を促進させるとともに、児童生徒の相互理解を深めているものと考えられます。集団で授業を行う意味はそこにあります。学校での学習は、社会的な活動です。

短時間でも、グループ学習などの児童生徒が互いに関わり合う活動を、意図的・継続的に、より多くの場面で取り入れていくことが大切です。

### (1) 多くの児童生徒は教科の学習で分からないことを教え合っています。しかし、一部に教え合っていない児童生徒もいます。

「教科の学習で分からないことを友だちと教え合っている」について、「はい」と回答した児童生徒と教員の割合は同様ですが、「あてはまる」と回答した児童生徒の割合は、教員の回答の割合を上回ります。また、「あてはまらない」と回答した児童生徒の割合も、教員の回答の割合を上回ります。

(p32 グラフ8群参照)

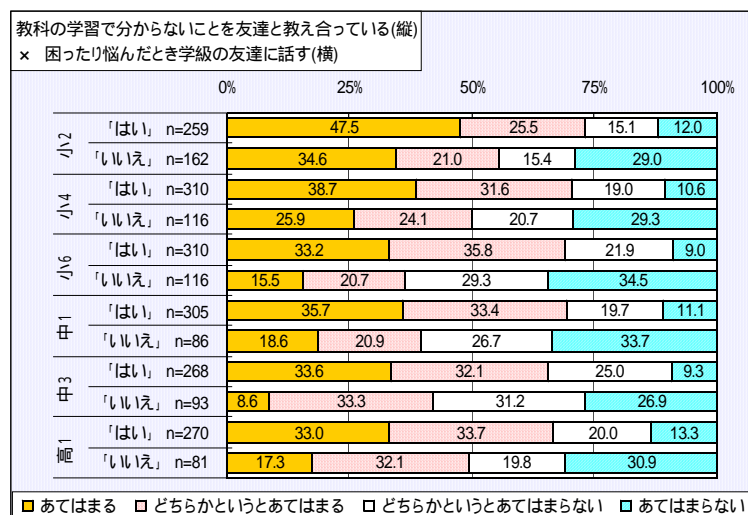


### (2) 授業で教え合う活動をしている児童生徒ほど、悩みを友達に相談しています。

教科の学習で分からないことを教え合っていると回答した児童生徒は、困ったり悩んだりしたとき学級の友達に話すときと回答する傾向がみられます。

- 別のデータからは、教科の学習でグループ学習や話し合い活動の機会が多いと回答した児童生徒は、学級の問題点を解決するためにそのことを話題にできると回答する傾向もみられます。

(p60 グラフ40群参照)





## 聞き取り調査より その6

### 学び合いと多様な校内研修を中心に 生徒の共同性、職員の同僚性の育成を推進するF中学校

F中学校では、平成16年度より生徒の学び合いの意義に注目し、授業の在り方を研究する一方で、授業研究を中心に校内研修を活性化する試みを進めている。全国的に有名な先進校をこの数年間で全教員が視察し、学び合いと校内研修の在り方についての具体的モデルを直接見聞し、考え方を共有している。

授業は学び合いを基本に据え、友達と話し合いながら学び合っていく学習スタイルが中心となっている。教員は「そのような学習を成立させる課題をつくることに苦勞するが、やりがいがある。」と話す。教室では生徒がコミュニケーションしやすいように、机の並べ方をコの字型やV字型にするなどの工夫を取り入れている。「座席が違うだけで生徒は変わる。」「うるさくはならない。」「生徒同士で教え合うようになるし、教え合うように指導する。」「生徒の意識が違う。」「突っ伏す子がいない。」というように、学び合いによる人間関係の向上と生徒指導の効果を強調していた。

生徒同士の学び合い中心の授業スタイルにしてから、「授業研究会が授業批判にならず、教員は生徒の変容を中心に見るようになった。」「授業公開が苦にならない。」「他教科の授業も見えるようになった。」など教員の意識にも変化があった。

このような教員の変化は、同僚性の育成を目指す職員研修にも起因している。その一つに「職員室の文化のアンケート」がある。これは、「現状に満足せず、教員としてあるべき姿を目指そうとする意見が、教員自身から提案される状態こそ、真の教育改革を支えるものである。」という考えをもとに、現時点での職員相互の関係が、真に望ましいものであるかどうかを把握するために行われている。

もう一つは、「アクションラーニング」である。これは、現在の自分の仕事の中での気づきを教員間で学び合うもので、教員が学習指導や生徒指導に関するレポートを提出し、互いにレポートを読んだ上でグループごとに自由に話し合う、ワークショップ形式で行われる研修会である。

「教員は、相互の得意分野を認めている。」「個性を認め合うことが基調としてある。」「考えてやっていることに対して文句を言われぬ。」「指導上の変化をいとわず、まずはやってみようという雰囲気がある。」という言葉のとおり、生き生きとした職員室の文化が根付いている。

#### アンケートからみられるF中学校の特色

##### 生徒が「はい」と回答した割合が、調査協力校(中)の中で高い項目

教科の学習で、わからないことを友達と教え合っている。

先生は、教科の学習で、グループ学習や話し合い活動の機会を多くつづけている。

##### 教員が「はい」と回答した割合が、調査協力校(中)の中で高い項目

生徒は、教科の学習で、友達の発言を真剣に聞いている。

私は、教科の学習で、グループ学習や話し合い活動の機会を設けるよう努めている。

私は、教科の学習での話し合い活動は、内容の理解や生徒指導のために、とても大切なことだと考えている。

## 7 家庭でのコミュニケーションの深さが、児童生徒のよりよい人間関係づくりを支えます。

きちんと向き合う時間が持っていますか？

家庭で話を聞いてもらっている児童生徒、さらに、家庭で決まりや約束について話し合いをしている児童生徒ほど、学校でよりよい人間関係を結んでいます。

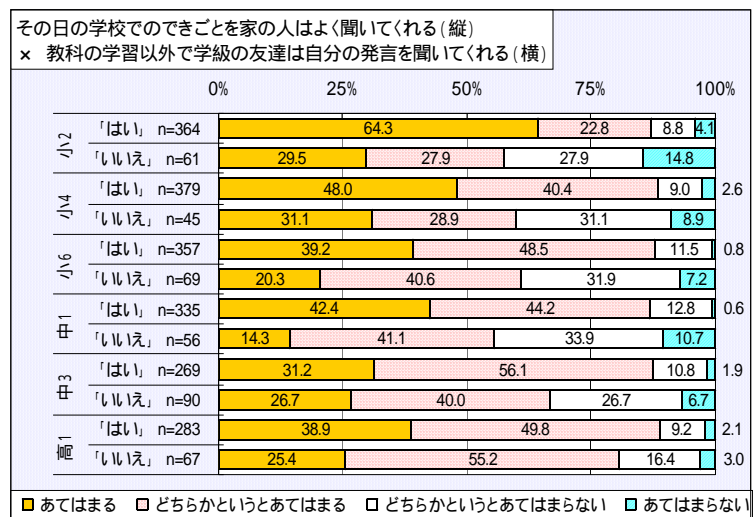
家庭でのコミュニケーションが児童生徒の人間関係づくりに深く関わっているものと考えられます。

児童生徒の努力を褒めたり、学校からの連絡やプリントについての話を聞いたりすることなどをきっかけにしながら、より深いコミュニケーションが家庭で図れるようにしていきましょう。

### (1) 家庭で話を聞いてもらっている児童生徒ほど、学校で友達に話を聞いてもらっています。

その日の学校でのできごとを家の人によく聞いてくれると回答した児童生徒は、学級の友達は、自分の発言をよく聞いてくれると回答する傾向がみられます。

(p60 グラフ41群参照)

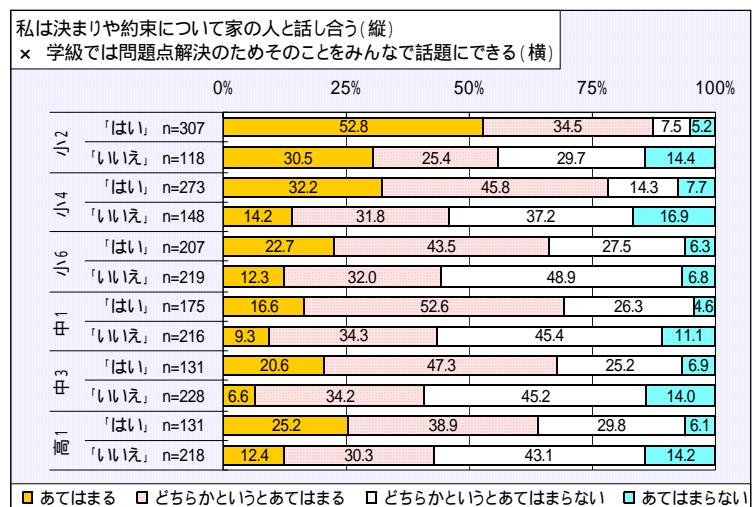


### (2) 家庭で決まりや約束について話し合っている児童生徒ほど、学級の問題点を解決するためにそのことをみんなで話題にできています。

決まりや約束について家の人と話し合うと回答した児童生徒は、学級の問題点を解決するためにそのことを話題にできると回答する傾向がみられます。

- 別のデータからは、学校からの連絡やプリントがあるとその内容について家の人に話すと回答した児童生徒は、学級の問題点を解決するためにそのことを話題にできると回答する傾向もみられます。

(p61 グラフ42群参照)

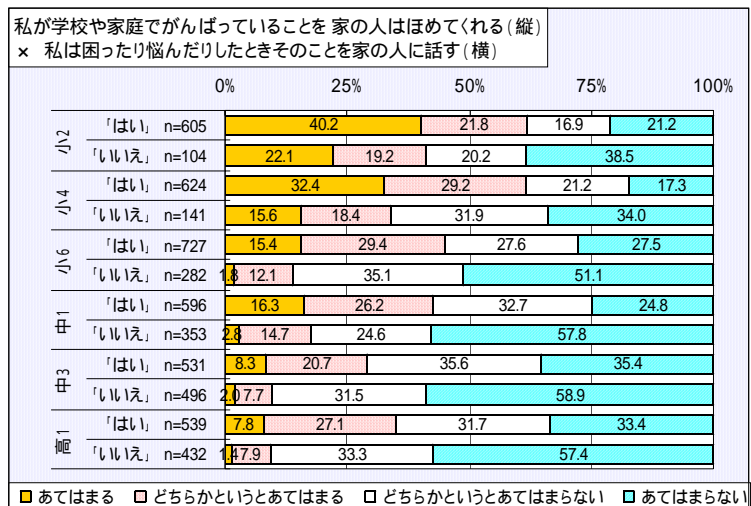


**(3) 家の人に努力を褒められている児童生徒ほど、悩みを話しています。**

がんばっていることを、家の人にはほめてくれると回答した児童生徒は、困ったり悩んだりしていることを家の人に話すと回答する傾向がみられます。

- 別のデータからは、学校からの連絡やプリントがあると、その内容について家の人に話すと回答した児童生徒は、悩みを家の人と話すと回答する傾向もみられます。

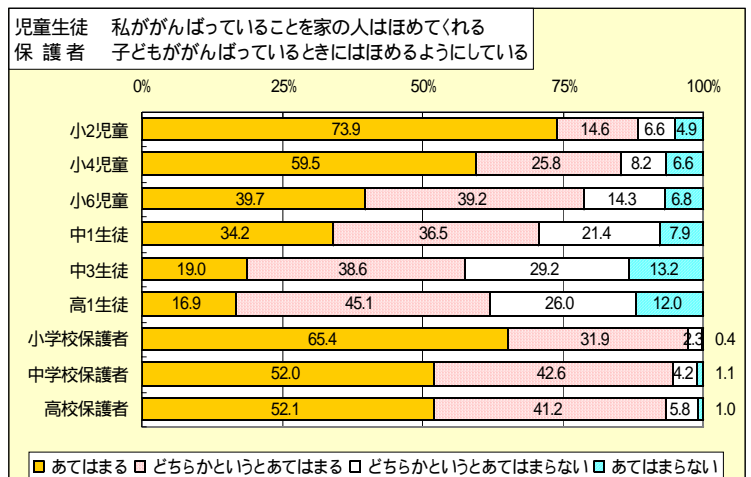
(p61 グラフ43群参照)



**(4) 家の人に褒められることについて、保護者の意識と児童生徒の受け止め方の差は、学年が上がるほど大きくなります。**

「がんばりを家の人からほめてくれる」について、「はい」と児童生徒が回答した割合は、学年が上がるにつれて減少します。一方、保護者が「がんばっているときにほめるようにしている」で「はい」と回答した割合は、学年にかかわらず9割を超えます。

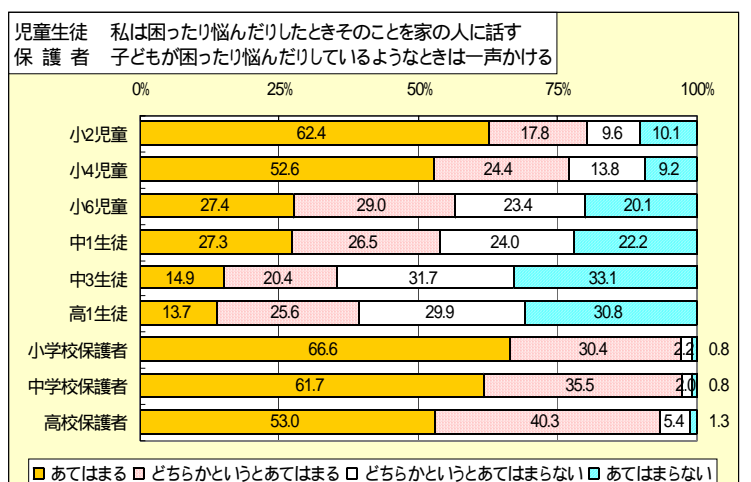
(p.37 グラフ16群参照)



**(5) 児童生徒は学年が上がるにつれて、悩みを家の人に話さなくなります。**

「困ったり悩んだりしたとき家の人に話す」について、「はい」と回答した児童生徒は、小6と中1では約6割、中3と高1では約4割です。一方、保護者が「子どもが悩んでいるとき一声かける」について「はい」と回答した割合は9割を超えます。

(p38 グラフ18群参照)



## 8 発達の特徴を指導に生かすことが大切です。

その指導が生きる時期を意識していますか？

小学4年から6年のコミュニケーションに関する意識は、友達、保護者、教員と関わる多くの項目で、しかも大きな割合で変化します。このような変化は、他の学年間では見られないものです。

人間関係づくりを考える上で、特に小学校4年はポイントとなる時期です。

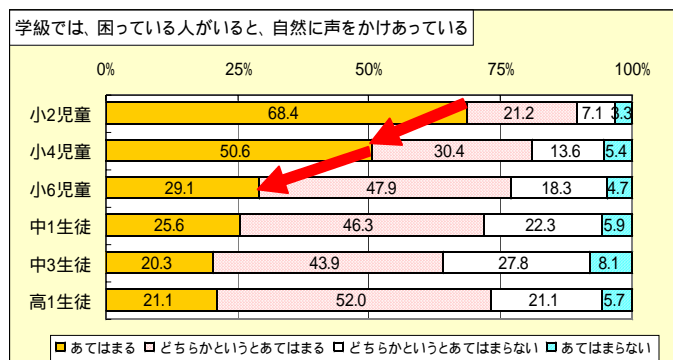
発達の特徴や発達課題を意識して、その時期に適した指導を心がけましょう。

### (1) 児童生徒と友達との関わりについては、小学校2年と4年との間、小学校4年と6年との間に段階的な差がみられます。

友達との関わりに関する項目について、「あてはまる」と回答した児童生徒の割合に着目すると、小2と小4の間、小4と小6の間に、多くの場合段階的な差がみられます。

(p27.28.30.31.33.34.44～46)

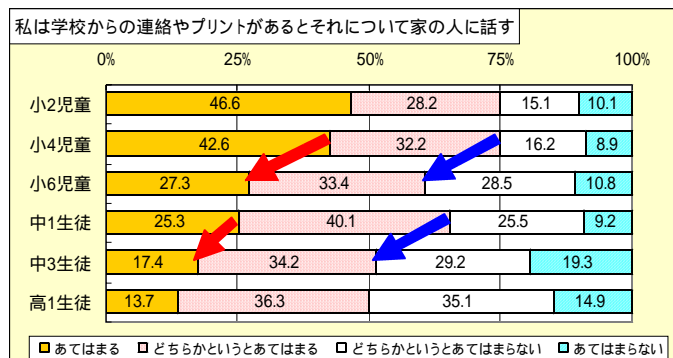
グラフ1.6.7.10.11.12.27～29群参照)



### (2) 児童生徒と保護者の関わりについては、小学校4年と6年との間、中学校1年と3年との間に段階的な差がみられます。

保護者との関わりに関する項目について、「あてはまる」及び「はい」と回答した児童生徒の割合に着目すると、小4と小6の間、中1と中3の間に、多くの場合段階的な差がみられます。

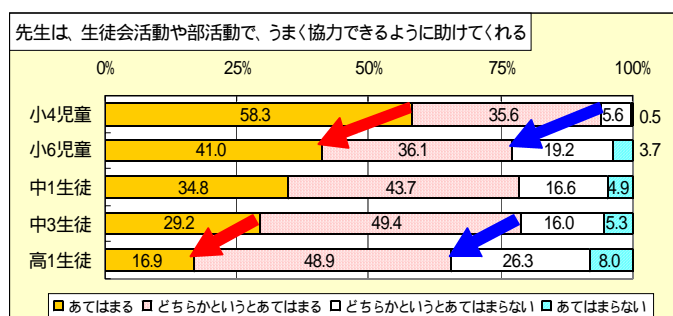
(p35～38 グラフ13～18群参照)



### (3) 児童生徒と教員との関わりについては、小学校4年と6年との間、中学校3年と高校1年との間に段階的な差がみられます。

教員との関わりに関する項目について、「あてはまる」及び「はい」と回答した児童生徒の割合に着目すると、小4と小6の間、中3と高1との間に、多くの場合段階的な差がみられます。

(p39～42 グラフ19～25群参照)

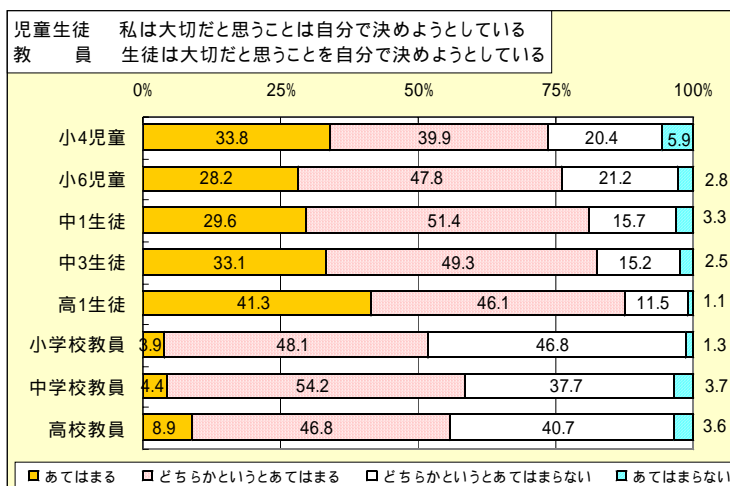




(4) 児童生徒は、教員が意識するよりも、大切だと思うことは自分で決めようとしています。

「大切だと思うことは自分で決めようとする」について、「はい」と回答した児童生徒の割合は、7割から8割です。一方、「はい」と回答した教員の割合は、5割から6割で、学校種による差はほとんどみられません。

(p29 グラフ4参照)



(5) 人間関係づくりにおいては、小学校4年の時期がポイントです。

小4から小6の間は、その他の学年間と比べて、多くの項目で、しかも大きな割合で変化しています。

よりよい人間関係をつくることについて、小4は小6と比べて指導しやすいことが分かります。

「あてはまる」と回答した割合が15%以上減少する質問項目(全35項目中)			
学年		質問項目	差 %
小2から小4	1 D	学級では、問題点をなくすため、そのことをみんなで話題にすることができる。	-20.4
	2 A	わたしは、友だちの気持ちを考えながら話を聞いている。	-19.2
	3 D	学級では、こまっている人がいると、しげんに声をかけあっている。	-17.8
	4 D	ほかの学年の人との活動では、こまっている人がいると、しげんに声をかけあっている。	-16.0
小4から小6	1 C	先生は、私の気持ちを考えて話を聞いてくれる。	-31.9
	2 C	先生は、学級での話し合いで、みんながうまく協力できるように助けてくれる。	-30.8
	3 B	私は、困ったり悩んだりしたとき、そのことを家の人に話す。	-25.2
	4 C	先生の朝の会や帰りの会の話は、よくわかる。	-23.6
	5 C	先生は、教科の学習で、友達の発言を真剣に聞くことの大切さを話してくれる。	-23.3
	6 B	私とその日の学校のできごとについて話すと、家の人をよく聞いてくれる。	-22.5
	7 B	私は、決まりや約束について、家の人と話し合う。	-22.5
	8 D	学級では、困っている人がいると、自然に声をかけあっている。	-21.5
	9 C	先生は、元気にあいさつしたり、声をかけてくれたりする。	-21.1
	10 B	私が学校や家庭でがんばっていることを、家的人是ほめてくれる。	-19.8
	11 C	先生は、清掃や給食などのときに、みんなと協力することの大切さを話してくれる。	-17.5
	12 C	先生は、生徒会活動や部活動で、みんながうまく協力できるように助けてくれる。	-17.3
	13 D	教科の学習で、学級の友達は、自分の発言をよく聞いてくれる。	-16.9
	14 A	私は、みんなで決めた決まりや約束を、守ろうとしている。	-16.7
	15 C	先生は、教科の学習で、グループ学習や話し合い活動の機会を多くつづけている。	-15.6
	16 B	私は、その日の学校のできごとについて家の人に話す。	-15.3
	17 B	私は、学校からの連絡やプリントがあると、その内容について家の人に話す。	-15.3
小6から中1		該当なし	/
中1から中3	1 B	私とその日の学校のできごとについて話すと、家の人をよく聞いてくれる。	-16.0
	2 B	私が学校や家庭でがんばっていることを、家的人是ほめてくれる。	-15.2
中3から高1	1 C	先生は、元気にあいさつしたり、声をかけてくれたりする。	-16.4
	2 C	先生の朝の会や帰りの会の話は、よくわかる。	-16.3

発達の特徴を生かす指導例

たとえば、小学校中学年で「聞き合いを通して体験や考えを共有する喜びを経験させる」ことを目標にするなら、低学年では、「聞くことを重視しながら、みんなの前で楽しく自由な発表を経験させる」などを目標に指導をします。そして高学年では、「討論によって見方・考え方が広まったり深まったりする喜びを経験させる」など、より高次の目標を設定した指導につなげるというような、意図的・計画的な指導の方策を考えます。クラス替えがあっても、指導を積み上げていけるように、組織として対応していくことが大切です。